

# 芽吹きの雨

高橋 恵

登場人物

満喜子

たま

1

午後。メレル・ヴォーリズ宅の居間には誰もいない。

満喜子が大きな足音を立てて現れた。少し遅れてたまが現れる。

たま 先生、待ってください。満喜子先生。どないしはったんです。

満喜子 なんでもありません。

たま もしかして、理事会でなんか嫌なことを言われたんですか。

満喜子 なんでもないと言っているでしょう。

たま けど、えらい怒ったはるやないですか。

満喜子 怒ってなどいません。

たま とにかくお茶でも飲んで落ち着いてください。うち淹れてきますよって。

満喜子 たまさん。

たま はい。

満喜子 他の皆さんに伝えてください。明日からいちばん古い、捨てても惜しくない服を着てくるようにと。

たま いちばん古い服。なんですか。

満喜子 隣の空き地を掃除します。

たま 掃除。

満喜子 お願いしますよ。

たま 隣の空き地って、近所の人らのゴミ捨て場になってるところですよ。ね。

満喜子 近江ミッションの所有地です。今は誰も使っていないので荒れていますが。

たま 掃除して、どうしはるんです。

満喜子 遊び場にします。

たま 遊び場。

満喜子 子供たちの。

たま 子供ってどこの。

満喜子 どこの子供でも。

たま えっ。

満喜子 どこの子供でも、遊ぶことのできる場所にします。

たま それはどういう、

満喜子 言葉通りの意味ですよ。本人が来たいと思えば来て、遊び、学ぶことができる場所にします。

たま 本人が来たいと思えば来て、遊び、学ぶことのできる場所。

満喜子 ええ。『プレイグラウンド』です。

たま プレイグラウンド。そんな場所を作ってどうしはるんですか。

満喜子 もちろん子供たちに来てもらうんです。あなた方がいつも私の家に来て家事を学んでいるように。

たま 子供たちにも家事見習いをさせるっていいことですか。

満喜子 いいえ。まずは思い切り遊んで元気を発散させます。そして手や顔を洗って清潔でいることも教えます。いつも言ってますよね。

たま 病気にならないための衛生術。

満喜子 そう。そして道具を片付けることも覚えます。使ったものを元の場所に直すこと。それから、争わずにみんなと一緒に遊ぶ方法も。

たま なんで急にそんなことを思いつかはったんですか。

満喜子 急に思いついたわけではありません。以前から考えていたことです。

この近江八幡に来てからずっと。

たま ご結婚されてからずっとですか。

満喜子 うちの前の道を、まっすぐ行ったところに長屋があるでしょう。

たま ああ、ありますね。

満喜子 その路地にいつも小さな子供たちが立っているんですよ。働いている親にかまってもらえず、ただぼんやりと日がな一日やることもなく過ごしている子が。

たま 先生、ちょっと待ってください。もしかしてその子供たちを集めて遊ばせるって言うんですか。

満喜子 そのつもりです。

たま そんなん、ウチは賛成できません。

満喜子 どうして。

たま そんなことしたら、また近所の人になんて言われるか。それでなくても先生は東京弁を喋る貴族さんや、ウチらとは違うお人やって目立ったはるのに。

満喜子 私はもう貴族ではありません。

たま そうですけど、この町の人は、まだまだそうは見てません。先生のご身分を上に見たはる人がぎょうさんいてはります。

満喜子 どうしてかしらね。

たま 先生は立派すぎるんです。

満喜子 私が。まさか。

たま いえ、本当です。いつもピンと真っ直ぐに背筋を伸ばして頭を高うして、堂々としたはります。目も黒うて大きゅうて、見られたら胸の奥まで見透かされそうで、ちょっとでも自分に後ろめたいことがあったら怖くなってしまうんです。

満喜子 たまさん、あなたまで私のことをそんな風に思っているの。

たま いえ私は、・すんません初めはそう思っていました。でも今は違います。

満喜子 私だって、ここに住み始めた時は、他の皆さんよりも古いポロポロの家で、ネズミや害虫を自分で追い払ったり、壁に古新聞を貼って暮らしてきてたんですよ。

たま そう考えると、せっかく有名な建築家のヴォーリス先生とご結婚はしたのに、災難でしたよね。

満喜子 まっ。

たま あ。すんません。えらい失言を。

満喜子 それで、あの長屋の子達をプレイグラウンドで遊ばせることの何が問題なんですか。

たま だってその子らは、その、えっと、

満喜子 なんです。

たま その子らの親は、・売春宿の、

満喜子 知っています。

たま せやったら分かりますよね。その子らを集めて遊ばせたら、近所の人らにどう思われるか。

満喜子 そんなことはわかった上で言っているんです。神様は豊かな者も、貧しい者も、商人の子も、売春婦の子も、仏教徒も、クリスチャンも皆等しく愛され、ともに生きることを望んでおられます。

たま もちろんそうです。けど、

満喜子 あの子たちに必要なのは、いい子に育つためのきっかけなのですよ。たま 先生のおっしゃることは正しいことです。けど、近江ミッションの空き地を勝手に使ったら、いくら満喜子先生でも、きっと叱られますよ。

満喜子 叱られる。誰に。

たま その、近江ミッションの偉い人たちに。

満喜子 いいえ。叱られませんでしたよ。

たま えっ。

満喜子 求めよ、さらば与えられんと言うでしょう。案外大丈夫でした。

たま それはどういう、

満喜子 さつき理事会でお願いしてきたんです。学校に行く前の子供たちを、健やかで賢い人間に成長させるための遊び場を作らせて下さいと。

たま ええっ。だって先生。そんなこと、理事さん達は賛成してくれはったんですか。

満喜子 反対はしませんでした。小さな子供がいても一日中働かなければならない母親たちにとって、そのような場所が必要だということは皆理解してくれたようです。

たま そうですか。

満喜子 頭ではね。

たま はあ。

満喜子 まあ正確に言うと、賛成というより黙認と言ったほうが、近かったかも知れませんが。

たま 黙認。

満喜子 彼らの顔にはこう書いてありました。「必要なことだとは思う。けれどもそんな子守のような仕事は果たして我々がしなければならない事業と呼べるものだろうか。」

たま やっぱり。

満喜子 しかし直接は言いません。おそらく私には、なかなか面と向かって対することができなかったのでしょう。かわりに長い長い沈黙がありました。この長い沈黙の意味を私もきちんと受け止め、しっかり考えてやっていた。かなければなりません。

たま せやから黙認。

満喜子 たとえ今は黙認であっても、承認は承認です。すべてが順調といかないくても、これまで通り、なすべきことを実行してゆくまでですよ。

たま はあ。

満喜子 たまさん、手伝ってくれるかしら。

たま えっと、掃除ですよね。

満喜子 その前に探し物を。

たま なにを探すんです。

満喜子 質草になりそうなものを。

たま えっ質草。

満喜子 掃除したあと、空き地に置くブランコやすべり台を買わなければいけ

ませんからね。

たま 満喜子先生はそう仰って、嫁入り道具のいくつかを質屋に売って、プレイグラウンドで使う遊具を買われました。私は先生のお手伝いをしながら「なんて偉い、立派な人なんやろ。」と感動し、けれどももう一方で「やっぱり大名のお姫様やった人は、嫁入り道具も違うなあ」とも感じていました。我ながら嫌な考えです。けど、私みたいな貧しい農家の人間には、満喜子先生の行動はお金持ちの施しのように見えてしまいました。元大名の娘。貴族のおひいさま。キリスト教を伝えるために一人でアメリカから日本に渡ってこられた近江ミッションの創始者、メレル・ヴォーリズ先生と同じように、そのメレル先生とご結婚されるため、やんごとない身分や財産をお捨てになった方。やっぱり満喜子先生は普通の人とは違う。そう思いながら、私は六人の仲間たちとひたすら掃除して、先生がおっしゃる「プレイグラウンド」のお手伝いをすることになったのです。

2

たまが部屋に入るなり座り込んだ。

たま あー、疲れた。

満喜子 たまさん、行儀が悪いですよ。

たま けど先生、うち、今日はホンマに疲れてしまいました。

満喜子 障子ですか。

たま はい。小さい子らの元気があるのはええことなんですけど、ちょっといたずらが過ぎるといっか。だって新しい障子にぜんぶ穴開けていくんです

よ。ふさいでもふさいでもプスーッと指突っ込んで。注意してもニヤニヤして全然聞いてくれへんし。あれ、いつそのこと紙せんぶ剥がしてサンだけにした方がええんとちやいますか。

満喜子 たまさん。

たま 冗談です。かんにん。

満喜子 仕方ありません。根気よく伝えましょう。あの建物は学び舎の一部で、勉強したり、遊んだりするためのものだど理解できれば、良くない習慣はなくなっていくますよ。

たま 本当にそうでしょうか。

満喜子 ええ。自分にとって大切なものだど理解できれば、それを壊したり汚したりするのは、悲しいことだとわかります。

たま でもそれだけじゃないんです。

満喜子 え。

たま ちょっと大きい男の子達。粗暴というか、腕白すぎるといっか。集まって寄ってたかって、ブランコを壊そうとしたり、砂場を汚したり。

満喜子 ああ、あの男の子たちですね。ちょっと大きい。

たま 一番年上の子は十四歳になります。正直、背も高いし体格もいいのでちょっと怖いです。叱ろうとしたんですけど、暴れて手がつけられなくて。それに、その子らを叱って目を離してる間に、小さい子らがケガするかも知れへんと思うと、結局なにもできませんでした。

満喜子 そうですねえ。

たま どうしましょう。次また乱暴なことを始めたら、ホウキで追いかけてお尻叩いたほうがいいですか。

満喜子 いけませんよ、叩くだなんて。

たま けど私も小さい頃、悪いことしたら母親に布団たたきでよう追いかけてられました。あれ結構怖いし、効き目ありますよ。

満喜子 いけません。

たま でも、

満喜子 叩けば表面的に止まったかのように見えますが、悲しみや憎しみを増やすだけです。あなたもお母様に叩かれたときは辛かったですよ。

たま そうですね。

満喜子 同じことですよ。人に叩かれるのは怖くて悲しい。同じ苦しみを彼らに与えてはいけません。

たま けど、せやったらいったいどうしたらええんですか。

満喜子 そうですねえ。

たま キリストさんは右の頬を打たれたら左の頬を差し出せて言わはったんですよね。うち、そんなこと、とてもやないけど出来へんなって思います。

満喜子 それでも差し出すんですよ。勇気を持って。

たま 目の前で暴れてる子見てもうたら、何かを差し出そうなんて気持ちどこかへ飛んでいってしまいます。

満喜子 そうですね。(少し考えて) 差し出しましょうか。左の頬も。

たま えっ。

満喜子 童話にもあるでしょう。旅人のコートを脱がせるには、冷たい風で吹き飛ばそうとするのではなく、暖かい太陽で自分から脱がせるようにするって。

たま いったいどうやって。

満喜子 その子たちをうちに招待しましょう。お茶とお菓子を用意して。

たま 先生の家に。とんでもない。絶対大変なことになりますよ。

満喜子 どうして。

たま 丈夫なブランコでも壊しかけた乱暴な子たちです。そんな子らを先生  
の家に呼んだら、きっと家の中がメチャメチャにされてしまいます。それに  
もしそれで先生がケガすることにもなったら、私・

満喜子 大丈夫ですよ。

たま どうして。

満喜子 彼らを立派なお客さまとして招待するんです。暴れる子もいるかもし  
れません。でも自分が一人前に扱われていると理解できれば、乱暴になる気  
持ちはきつと消えます。

たま 無理です、そんなこと。

満喜子 やってみなければわかりません。

たま 先生。

満喜子 メレルもね、バイブルクラスを始めた頃、反感を持った乱暴な生徒に  
困らされたことがあると言っていました。それでも怪我をした生徒が乱暴を  
した生徒のために祈るのを聞いて、行いをあらためたといいます。私たちも  
同じように立ち向かわなければならぬんですよ。

たま ・・はい。

満喜子 そうと決まれば準備しましょう。お菓子を焼かなければいけません

ね。何人くらい招待できるかしら。

たま 男の子たちは二十人以上もいるんですよ。

満喜子 二十人。それは少しおもてなしするには多すぎますね。では十五人を  
招待しましょう。十五人なら何とかおもてなしできると思います。彼らの中  
の十五人を選んで来てもらいましょう。

たま 満喜子先生。

満喜子 十五人分のお茶とお菓子は用意が大変ですね。手伝ってください。たま子さん。

たま 先生はそうやって準備を整え、十五人の男の子を家に招待しました。

彼らははじめ、興奮した動物のように家具を壊し、金切り声をあげ、鼓膜が破れるかのような大声で叫びながら暴れました。私が言った通り家の中はメチャメチャになりました。しかし、満喜子先生が辛抱強く彼らに話しかけていきますと、少しずつ静かになっていきました。そしてやがて、全員が満喜子先生の言葉に耳を傾けるようになりました。私は目の前で起こっていることが、はじめは信じられませんでした。なぜ、あの野生児たちがおとなしくなったのでしょうか。暴れることに疲れて、飽きてしまったのでしょうか。そうではありませんでした。彼らはたしかに素直に満喜子先生の言うことを聞いてお菓子を食べ、一緒にお茶を飲んだんです。太陽の暖かさに負けてコートを脱いだかたくなな旅人のように。・彼らが帰った後、荒らされた部屋を片付けながら私は先生に聞きました。

たま 先生。彼らはなんでおとなしく先生の言うことを聞くようになったのでしょうか

満喜子 あなたも見ていたでしょう。

たま はい。でもわかりませんでした。

満喜子 私はね、あの子達を一生懸命、言葉で暖かくしようとしたんですよ。

たま 言葉で、暖かく。

満喜子 暴れている彼らを見て気がつきました。あの子たちは誰かに愛して欲

しかったんです。

たま　なんでそんなことが分かったんです。

満喜子　私もね、心の中は長い間ずっと、誰かに愛してほしいという気持ちでいっぱいだったから。

たま　えっ、先生が。

満喜子　ええ。

たま　だって先生は貴族で、何一つ不自由のない生活を送ってきはったんじゃないんですか。

満喜子　傍からはそう思われていたのかもしれませんが、けれど私の心の中は、いつも晴れない雲に覆われていましたよ。

たま　そんな。

満喜子　私の母は私を可愛がってくれました。しかし九歳の時に亡くなりました。そして父は・・私は父とはとても長い間、和解することができませんでした。

たま　そうなんですか。

満喜子　父は、母以外の何人もの女性に、子供を産ませるような人でした。古い時代から続く悪い風習です。父は私の世話をしてくれていた侍女も妾にして子を産ませました。

たま　え。

満喜子　母は三人の妾になった侍女たちや、その子供たちと一緒に暮らし、分け隔てなく接していました。けれどきつと大変苦しんだらうと思います。

そのせいで家の中はいつもさまざまな問題に満ちていました。私は思いません。「絶対に結婚はしない。そうすればどんな男性も、私をこんな目に遭わせることはできないのだから」と。私が六歳の時のことです。

たま 先生のお父様が。

満喜子 封建制度時代の領主にとって、当然の権利だったのかも知れませんが、  
けれど私は父が許せませんでした。しかも母は父が理不尽な仕打ちをして  
も、父への忠誠を捨てず、黙って従っていました。私は早くに母を失い、父  
に抵抗を覚えながら育ったのです。

たま そうやったんですか。

満喜子 幼い頃の記憶ですが、母はよく聖書を読んでいました。私は母の声や  
顔をハッキリとは覚えていませんが、祈る姿はよく覚えています。食事の前  
や寝る前に背筋を伸ばして真っ直ぐ座り、よく祈っていました。頭を下げ、  
長く静かに祈りを捧げる姿が、宝物のように私の一生の思い出になっていま  
す。

たま それで先生も洗礼を受けられたんですね。

満喜子 母がね、「汝の敵を愛しなさい。」という言葉に出会って感銘を受け  
たと言っていました。おそらくそのような家の中で生きなければならぬ境  
遇だったから、自分がなさねばならない生きる希望として響いたのでしょ  
うね。

たま 「汝の敵を愛しなさい」

満喜子 言葉で理解するのは簡単です。けれどこれほど実行することが難しい  
言葉ありません。だからね、たまさん。実行したのですよ。難しいこと  
だから。かつて私の母がそうしたようにね。

たま 先生。すみませんでした。

満喜子 えっ。

たま 私、あの男の子たちのこと、初めから無理や、出て行ってもらうしか  
ないって決めつけて。でもこれからは戦います。自分の弱さと。

満喜子 私もね。本当のことを言うと、はじめは少し驚いてしまったのよ。怖いと感じたくらいにはね。

たま え。・あつ。

満喜子 あなたがたにああいった手前、勇気を振り絞らずにはいられなかった。だからうまくいったの。でも他のみんなには内緒ですよ。

二人、顔を見合わせて少し笑った。

満喜子 片付けてしましましょう。

たま はい。

二人は再び片付けをはじめた。

たま 満喜子先生の幼い頃にそんなことがあったなんてまったく知りませんでした。大名のお姫様にはお姫様なりの苦労があったんやと思いました。そして幼い頃、母親と死に別れ、父親からは愛情を注がれることなく育ってきた先生自身の辛い経験があるからこそ、あの長屋の路地にいた子ども達を放っておけなかったのかも知れない、と想像しました。先生が自分の持ち物を売ってでもプレイグラウンドを作ることこだわった理由が、この時初めて私は理解できた気がしました。

満喜子 男の子たちの一件があつてから、たまさんをはじめ見習いの子たち

は、家事以上にプレイグラウンドでの子供たちの世話に情熱を傾けるようになりました。子供たちは次第に健康で清潔になり、遊びだけでなく自ら進ん

で学ぶようになりました。そして、初めは少なかった人数も日に日に増えてゆきました。ただ黙認してもらおうことで行っていたこの事業は、近江ミッシヨンのメンバーにも正式に教育の事業として認められ、とうとう清友園という幼稚園を作ってもらえることになりました。清友園の建物はメレルが設計してくれました。彼は他の建築と同様、そこで過ごす子供たちのことを第一に考え、太陽の光がたっぷりと入るようにと、大きな窓を取り付けてくれました。子供たちがぶつかってもケガをする心配のない床や階段を作り、自分で持ち運べるようにと藤で編んだ小さな椅子を作り、音楽が学べるようにとオルガンを取り付けてくれました。幼稚園は子供たちだけではなく、母親たちも学べるようになり、ますます訪れる人が増えてゆきました。力によってではなく愛こそが人間の感情を抑制することができる。そのことを私は自分の過去を通して学び、この地でようやく実践することができるようになったのです。

3

たま 満喜子先生のところには、さまざま問題を抱えた子供が集まるようになりました。西川昌子さん、はま子さんの姉妹もそうです。お姉さんの昌子さんは先天性股関節脱臼の手術のあと、悪化から足が不自由になりました。妹のはま子さんは耳が不自由でした。先生は、けれど他の子と同じように受け入れられました。

満喜子 何事もできることは自分です、というのが私の方針です。

たま でも、昌子さんもはま子さんも、お家ではずっとお世話係がおって、着替えから何からすべてやってもらっていたと聞いてます。今から訓練する

のは無理やないですか。

満喜子 たとえ彼女たちが裕福な家の娘だったとしても、生まれた時から受けてきた多くの助けが得られなくなる日が、いずれ来るかもしれません。まずはやってみようとしなければ。そうしなければ彼女たちはずっと、なにもできなままですよ。

たま でも、

満喜子 私がね、アメリカのプリンモアカレッジと一緒に生活したルームメイトに、フローレンスという女性がいました。彼女は小児麻痺をわずらっていて、話すことも難しく、自分の髪をとかすことさえできませんでした。私は彼女を助けるためにいろんな方法を試しました。ドレスが破れたら、代わりに縫ってあげるのではなく、針に糸を通して「自分で直して」と渡したり、「これからは毎朝自分で髪をとかしてね」とクシを渡して部屋から出て行ったり。フローレンスは始めは大変な癩癩を起こして怒っていましたよ。「満喜子が私の髪をとかしてくれない。私は日本人と同じ部屋には寝ない。」って。

たま まあ。

満喜子 けれどなぜ私がそうしたのかをきちんと話すと、彼女は黙って私に従って、自分でドレスを縫い、髪をとかそうようになりました。もちろん、初めからうまくはできません。でも次第に難なくできるようになり、そのうち美しくできるようになると、彼女はそのことを誇りに思うようになりました。それからは私が彼女を助けようとする、いつもこう言って拒むようになっただけです。「あなたにしてもらったら、私はいつまでもそれができなくなってしまう。」

たま だから何事も自分で、ですか。

満喜子 ええ。そうして私たちは親友になりました。でもそれだけじゃなかったんですよ。

たま というと。

満喜子 浪川かつさんが清友園のためにアメリカへ留学に行きますよね。

たま ええ、保育士養成プログラムに参加されるんですね。私も英語が話せたら行きたかったんですけど。

満喜子 そのかつさんの留学費用を寄付してくれたのは、ほかでもないそのフローレンスなんです。

たま ええっ。

満喜子 彼女は自分で自分のことができるようになっただけでなく、自分以外の人を助けることもできるようになったんです。自分の行動に誇りを持つということとは、人を強く高めてくれるものなんですネ。

たま 誇りですか。

満喜子 ええ。自分がこの世界に奉仕できることがある、という希望です。

たま 満喜子先生は他にも結婚せずに妊娠した少女や、夫から虐待を受けて

自分や家族のための食べ物がない者なども受け入れました。そして幼稚園や

近江ミツシヨンの工場での補助など、またヴォーリズ家の家族の一員として

実践的な仕事の提供という形で思いやりを示されました。

雨が降り始める。

たま 降ってきましたね。

満喜子 冬から春になる時期はよく降りますからね。

たま 一雨ごとに暖かく。

満喜子 雨は好きじゃありませんが、そう思えば嫌にはなりませんね。

たま この季節の雨は芽吹きの雨って言うんですよ。

満喜子 芽吹きの雨。

たま 雨そのものは暗くて冷たいんですけど、草も木も、動物もこの雨がないと強く育たないって言われています。

満喜子 芽吹きの雨ですか。神様はよくご存知なのですね。

たま えっ。

満喜子 強く大きく育つためには雨も必要だということですよ。

雨は降り続いた。

たま 満喜子先生は耳が不自由で普通の幼稚園では学ぶことができない子供のためにアメリカの特別な教材を取り寄せられました。そして使用方法を翻訳し、家のリビングで耳の不自由な子供のために学校を始められました。

満喜子 メレルもね、日本に来てキリスト教を伝えるために、こんな風に自宅に生徒さんたちを招いたのですよ。

たま バイブルクラスですね。

満喜子 ええ。そのバイブルクラスがあまりに評判がよくて、たくさんの生徒がキリスト教の信者になってね、それで結局教師を辞めさせられることになったのだけれど。

たま 聞いたことがあります。それでメレル先生は建築家になったって。

満喜子 大勢に増えたバイブルクラスの青年たちのため、YMCA会館を建てていた最中だったんです。自分の貯金と、アメリカの友人からの送金、そし

て亡くなった親友アンドリュースからの寄付を充てて作ろうとしていました。着々と梁が積み上げられ、屋根ができ、壁ができました。けれどそんな時に突然、解雇されたのです。

たま さぞ落胆されたでしょうね。

満喜子 ええ。けれど疲れ果てて床に就いたとき、心にひらめいたそうです。

自分は一粒のカラシナの種だと。

たま カラシナの種。

満喜子 そしてもう一つ、建築が得意だったということをお思い出させてくれたって。

たま それが近江ミッションの始まりやったんですね。

満喜子 メレルが教師を辞めさせられたこと。そのことが彼を建築家にし、近江での布教活動と経済的独立の両方を可能にしました。そして彼が建築家であつたことが、私とメレルを引き合わせてくれました。だから私はこうしてここにいます。

満喜子、少し黙って深呼吸した。

たま 先生、どないしはったんですか。

満喜子 少し疲れましたね。

たま また深呼吸ですか。

満喜子 え。

たま この前も深呼吸してはりましたよね。

満喜子 そうだったかしら。

たま そうです。大きな深呼吸。時々先生はされています。何かあつたんで

すか。

満喜子 ありませんよ、なにも。

たま 私にできることがあるんやったら。

満喜子 大丈夫。今日はもうお休みなさい。随分遅くなってしまったわ。

たま 満喜子先生。

満喜子 なあに。

たま 差し出がましいかもしれませんが、この前東京であった大震災の後からずっと、メレル先生が大変お忙しくされてはるやないですか。

満喜子 そうですね。

たま それで満喜子先生も何かお疲れになることがあるんやないでしょうか。

満喜子 大震災。

たま メレル先生の建築物は、あの大きな揺れの中で一つも壊れなかったとお聞きしています。すべての建物が倒れなかったと。それで今、建築の注文が殺到してるって。うち、それはええことなんやと思ってました。でも、

満喜子 もちろん、いいことですよ。たくさんの方がメレルに造って欲しいと言ってくれる。それはとても有難いことです。

たま けど、そのせいで元々留守がちだったメレル先生が、このごろまったくお家におられんようになってしまいましたよね。

満喜子 何が言いたいんですか。

たま 満喜子先生、寂しいんやないですか。

満喜子 仕方ありません。皆が彼を必要としているのですから。私も彼も承知の上で一緒になったんです。

たま でも、私わかりません。好きな人がいたら、ずっと一緒にいたい。

満喜子 たまさん。

たま お子さんがいらっしやったら、また違っていたんでしょうけど。

満喜子 ……。

たま すいません。私つい、

満喜子 大丈夫です。謝ることはありません。

たま でも。私、余計なことを。

満喜子 私には、本当の娘でなくてもたまさん達のような娘が何人もいま

す。清友園にはもっと大勢の子供たちがいます。私もメレルも、それで十分

なんですよ。

たま 先生。

満喜子 さ、今日はもう休みなさい。

たま 失礼します。

たま、去った。

満喜子 たまさんに子供、と言われて、正直ヒヤリとしました。子供。会社

を興し、事業をしているということは、通常の業務だけでなく、時にはその

事業への財政的支援を得るために海外を飛び回らなければなりません。建築

やメンソレータムのような収入になる事業ではなく、清友園や、病院といっ

た採算を度外視して人のために行っている事業は、その事業だけでは維持

すらできず、建築や他の事業、寄付によってまかなわれています。そのこと

の大切さがわかっているから、彼は神の活動のために自分自身を捧げている

のだから、私の寂しさなどは取るに足りないことだ、そんなことは結婚の一

周年の日に家に帰ってこなかったことでよく分かっているはずではないか、

これまで何度も彼が家を空けるたびに自分に言い聞かせてきた言葉を、私はもう一度自分に言っていました。子供。「君には幼稚園に九十人を超える子供がいる。もし君に自分の子がいたら、愛おしい他の子供たちにかける時間が減っただろう。君には私たちとともに暮らすすべての娘たちがいる。」メレルはそう言ってくれた。ともに暮らすすべての娘。そう。でも。

雨が降ってきた。

4

たま 近江ミッションが近江兄弟社となった時、戦争の足音が近づいてきました。日本軍は中国と満州に軍隊を展開し、来たるべき「大戦」に備えて力を誇示していました。戦争が始まれば一千回の地震よりも、もっと破滅的なものになる。先生たちはそのように考えておられました。

満喜子 メレルは「もし祖国が私の選んだ国の敵になったならば、私がなすべき義務は何であるのか」ということを考えるようになりました。彼はすでに生まれた土地よりも長く日本に住んでいました、いずれはこの近江八幡に骨を埋める決意をしていたからです。

たま えっ、日本人に。

満喜子 そうです。

たま メレル先生が日本人にならるってどういうことですか。

満喜子 帰化し、日本国籍を取得するのです。

たま なんてまた、そんなこと。

満喜子 日本とアメリカの間で戦争が起きたとき、日本人として日本側に立つためです。

たま 戦争。日本とアメリカが。

満喜子 メレルがアメリカ人である限り、彼の思いとは関係なく、メレルをスパイと呼ぶ人は大勢いるでしょう。

たま でもそんなこと、どうやって。

満喜子 弁護士の方に相談しました。私たちは一旦離婚します。

たま えっ。

満喜子 そうすれば私は元の一柳の姓に戻ります。もちろん貴族の身分は捨てていますから一般人としてです。そうして次にメレルを一柳の養子にして、私の代わりに家長とする手続きをとればいいんです。

たま 離婚ですか。

満喜子 たった三分のことですよ。

たま でも三分のことでも嫌ですよね。

満喜子 仕方ありません。

たま 手続きはそれだけでいいんですか。

満喜子 いいえ。帰化の儀式として彼の意思を公にするために、神社に参拝する必要があります。

たま 神社に。そんなこと宣教師の先生は反対しませんか。

満喜子 するでしょうね。たいそう怒られると思います。でも、国家神道と宗教の神道は違います。神社に参拝することは、アメリカで合衆国憲法を判事の前で読むのと同じことで、手続きの一つに過ぎないのです。

たま 名前はどうされるんですか。

満喜子 名前。

たま 苗字は一柳になられたとしても名前は、

満喜子 メレルはメレルですよ。

たま そのままなんですね。

満喜子 読み方はそうです。でも表記は違います。アメリカの「米」、往く来るの「来」、留まるの「留」と書きます。当て字です。『アメリカから来て留まる人』という意味になります。

たま アメリカから来て留まる人。

満喜子 これ以上ピッタリな名前はないでしょ。

たま はい。

たま 一九四一年一月、メレル先生は満喜子先生の姓、一柳を名乗り、一柳米来留と改名されました。たくさんの方々が日本人の方が日本を離れられる中、メレル先生はあえて日本に残り帰化されたのです。そしてそれからわずか十一ヶ月後、真珠湾攻撃が始まりました。

満喜子 開戦のニュースを告げる新聞の号外が出たとき、私は学校で耳が聞こえない人のために授業をしていました。私はアメリカ人だったメレルにどんなことが起こるだろうかという恐れに身も凍る思いでいました。

満喜子 東京へ行きます。

たま 東京へ。

満喜子 近江八幡にメレルを連れ戻すのです。

たま 近江八幡ならメレル先生は大丈夫ですよね。

満喜子 だといいいのですが。

たま いままで一番大きな業績を残して、みんなに尊敬されてこられたやないですか。

満喜子 戦争の恐怖は、跡形もなく過去の愛情を奪い去ってゆきました。町の人たちは私やメレルを避けるようになり、犯罪者が来たかのように通りの向こう側へ渡ってゆきました。近江兄弟社もまた会社全体が恐怖のあまり冷や汗をかいているようでした。「敵を憎まないようにしましょう。私を憎み、悪意を向ける人を軽蔑しないようにしましょう。どのような間違いが人の心を抑圧するのか、どのような偏見が人の心を引き裂くのか、私にはほとんどわからない。しかし、彼らをまだ兄弟として思おう。」戦争による興奮は、近江八幡の人々の心をしっかりと捉えていました。そして私たちはそれを和らげることができず、できたのは憎まないことだけでした。

たま 先生、警察が来たって本当ですか。

満喜子 ええ。屋根を剥がして、ラジオのアンテナを持って行きました。

たま なんてそんなことを。

満喜子 うちのアンテナはアメリカの海軍にメッセージを送っていて違法だそうです。

たま そんな。何の証拠があつて。

満喜子 証拠はありません。けれど彼らがそうしようと思えば、いくらでも私たちに罪を着せることはできるでしょう。

たま そんなん。

満喜子 もうすぐ近江兄弟社にも軍当局が来るそうです。

たま 軍が。

満喜子 裕仁天皇と神社の写真をすべての部屋に掲げるように、と言われました。  
た。

たま キリスト教の会社なのに、神社の写真に手を合わせろって言うんですか。

満喜子 メンソレータムは八割を陸軍に送らなければならないとも言われました。  
た。兵隊さんに持たせるために。

たま どうにもできへんですよね。

満喜子 私が日本人でメレルも帰化していたので会社全体の没収は免れました。  
た。

閉鎖も考えられましたが、工場には四百人も人が働いていて、千人以上の家族が食べていかなければなりません。逆らえないのです。

たま 病院にも軍隊がきたって聞きましたけど。

満喜子 ええ。結核病院は今後軍が使うそうです。

たま 患者さんたちは、

満喜子 部屋を空けるために、家に戻されました。

たま 誰も反対しようとはしなかったんですか。

満喜子 日本人は何百年も権力に支配され、支配に怯えて生きてきました。ち

ょうど私や私の母たちが長い間父に支配されてきたように。ですからアメリカと同じような言論の自由や独立心が、私たちの間ですぐに発揮されて、事態が変わるといふことになるには、まだまだ時間がかかるのでしよう。

たま そんな言い方、満喜子先生らしくありません。

満喜子 昨日ね、軍は清友園にもやってきたんですよ。

たま えっ。

満喜子 私の知らない女性が園長に任命されたという書類を見せられました。

私には何ひとつ知らせずに、です。私は園長を解任されました。

たま どうして。先生がお作りになってここまで育ててきたものを、奪ってしまうなんて。

満喜子 私が子供たちに、天皇がただ一人の神である、と教えなかったためでしょうね。

たま でも満喜子先生は元々華族のご身分で、裕仁天皇の弟の宣仁親王ともご面識があるから大丈夫やって聞いてたのに。

満喜子 事態は私たちが考えているよりも随分悪いようです。

たま 先生。

満喜子 私は皇居へ行ったことがあります。陛下が自分のことを神だと信じていないのを知っています。陛下は熱心な海洋科学者で、相模の避暑地においてになって、楽しそうに顕微鏡の標本集めをされておいででした。世界全体が狂っているようです。もう私もメレルも近江八幡でできることはありません。そのことについて、メレルとは以前から話をしていましたが、ようやく決心がつかしました。私たちは戦争が終わるまで軽井沢へ行きます。

たま 軽井沢へ。

満喜子 山に囲まれ、凍るように冷たく、食べ物もほとんどありませんが、谷を包む霧のおかげで大都市の空襲からは守られるでしょう。

たま 私も軽井沢へ連れて行ってもらえませんか。

満喜子 たまさん。

たま 私は満喜子先生の娘です。血は繋がってなくても、私たち見習いはみんな先生の娘です。先生は私にお返しできへんくらい沢山の世界を見せて下さいました。私を無知の闇から救って下さいました。だから今度は私が先生達を守ります。必ずお役に立てるよう努めます。どうか、私も軽井沢へ連

れて行ってください。

満喜子 たまさん。ありがとう。

5

たま メレル先生、満喜子先生、メレル先生のお母さま、そして私の四人は、ゆっくり走る鉄道を何度も乗り換え軽井沢へ行きました。満喜子先生のおっしゃったとおり、凍りつくような部屋には暖房設備はなく、暖をとるのはダイニングにある薪ストーブだけでした。その薪も手に入れることは難しく、食べ物を手に入れることはもっと難しいことでした。そしてこれらのことは精神的にも肉体的にも弱ってお疲れになっていたメレル先生の心臓に発作を起こさせたのです。メレル先生は長いあいだ床につかれておられました。

満喜子 深呼吸。

たま え。

満喜子 たまさん、このごろ何度も。

たま そうですね。けど先生も。

満喜子 してましたか、深呼吸。

たま ええ。それに前はもう少し大股でずんずん歩いてはったのに、この頃はゆっくり小幅で歩かはるようになりましたよ。

満喜子 そうかしら。お腹が空いてしまって。疲れているのね。

たま お米の配給がまた減りましたから。

満喜子 そうね。

たま キャベツなんて一日一枚やったのが、三日で一枚になってもうて。

満喜子 それでも、時々たまさんが周りの農家で牛乳をもらってきてくれて  
いるから助かってるのよ。

たま メレル先生もお母様も寝たきりですから、少しでも栄養を摂ってもら  
わんと。

満喜子 そうね。

たま メレル先生の具合はどうですか。起きられるようにはならはったみた  
いですけど。

満喜子 日記を書いているわ。

たま 日記。

満喜子 心臓が弱っているので負担をかけることはできないから、日記を書く  
事に夢中になっているみたい。その日記のタイトルがおかしくてね。

たま なんて言うんです。

満喜子 『失敗者の自叙伝』。

たま えらい自信のない感じですね。

満喜子 いいえ。理想が高く、純粹で遠いからこそ自分自身では沢山屈折して  
いるように感じるのよ。

たま どんなこと書いてはるんですか。

満喜子 幼い頃の思い出や近江八幡へ彼がきた頃のことね。そうそう、昨夜そ  
のことを話していたら私も思い出してね。

たま なにをです。

満喜子 私がアメリカへ留学に行った頃のこと。それまでは買い物に行くとき  
も必ず侍女がついてきていたのに、初めて外国で一人で列車に乗って。

たま 大冒険ですね。

満喜子 お腹が空いたので、軽食のスタンドへ行ってみたの。お店の人にホットドッグを勧められて「私、犬は食べません」って言ったのよ。

たま 先生が、ですか。

満喜子 ホットドッグというのが、どんな食べ物か知らなかったの。犬を焼いたものだと勘違いしたのよ。

たま ホットドッグ。

満喜子 それで、その後もなににも食べられなくて列車で帰ることにしたわ。でも途中二十分の停車時間があったね。どうしてもお腹が空いて我慢できなかったから、コートを座席に置いて駅のレストランに入って。

たま なにを食べはったんですか。

満喜子 ミルクとバナナ。(少し笑う) それしか知ってる言葉が書かれてなかったのよ。それで、ホームに戻ったら列車が発車してしまっていてね。

たま ええっ。

満喜子 おいてけぼりよ。私のコートは列車に乗っていたけれど。もう真っ青になって日本語で駅にいた人に片っ端から聞いて回ったの。

たま 英語は使わなかったんですか。

満喜子 使えなかったの。動揺してしまって日本語しか言葉が出てこないの。それでも何とか身振り手振りで駅員さんに伝えたら、どうにかわかってもらえたみたいで。

たま それで。

満喜子 実は私の乗っていた列車は、急行の通過待ちのために移動していただけだって。降りた時と別のホームを指さしてくれて、そしたら確かに乗っていた列車がそこにあったのよ。

たま よかったですね。

満喜子 異国で不安になるって気持ち、メレルも同じように味わったんだわって思ったら、変な話だけれど、なんというのかしら、少し嬉しくなってしまうってね。

たま 満喜子先生とメレル先生は似ておられますから。

満喜子 似てる。私とメレルが。

たま 見た目は違いますよ。でも理想に向かって真っ直ぐに進まれているところが、とても似たはるな、って思います。

満喜子 そうかしらね。

たま がむしやりに働き続けられるところも。

満喜子 そういえば。

たま なんです。

満喜子 東京帝国大学から手紙が届いていたわね。メレルに英語の聖書の講義をして欲しいって。

たま 本当ですか。すごいやないですか。ちゃんとメレル先生のことをわかってくれたはる偉い人が東京の大学にはいてはるんですね。

満喜子 でも、メレルの体調のことを考えると。まだ寒い列車に乗れるほど良くなっていないはずだから心配で。

たま メレル先生はたぶん行かれますよ。お断りになられるはずないです。

満喜子 だからこそ心配なんですよ。

たま しっかり看病して、お元気になっていただきましたましよう。食べ物は少なくて、メレル先生にはバイブルクラスがきつと一番のご馳走です。

満喜子 そうですね。

たま それに満喜子先生も。

満喜子 なんですか。

たま 学校を開こうと考えておられますよね。軽井沢で。

満喜子 どうしてわかったんですか。

たま わかりますよ、そりゃ。プレイグラウンドを始める時とおんなじように見てはりましたから。子供たちを。

満喜子 軽井沢にも沢山の家族が空襲を逃れて疎開しているでしょう。若い人や子供たちがすることもなく、ただ毎日時間が過ぎるのを待っているのは良くないと思ったんです。

たま まあ、旦那さんが軍隊にとられて、母親が働かないと食べていけない家の子は、居場所がないようですよね。悪いことしても野放しやって聞きました。

満喜子 もっと小さい子のためには託児所も必要でしょうね。

たま でも、どうするんですか。この家に呼ぶには狭すぎますよ。

満喜子 大通りにメレルが建築事務所として使っていた場所があります。そこを開放すれば学校として使えると思いますよ。

たま では決まりですね。

満喜子 でもお義母様が。

たま 先生。

満喜子 なんですか。

たま されたいんでしょう。学校。

満喜子 そうですね。

たま なさったらいいやないですか。満喜子先生にはやっぱり学校のお仕事が一番やと思います。メレル先生はお元気になられます。お義母様のお世話是我がします。だから満喜子先生も学校のお仕事をなさってください。

満喜子 たまさん。

たま 先生は先生を必要としてるたくさんの子供たちのために、学校を開いてあげてください。

満喜子 たまさんは戦争中ずっと白い目で見られていた私たちに、変わらぬい誠実さで接してくれました。彼女の明るさとたくましさは、私たちにとって大きな支えでした。

たま その後、メレル先生には京都の大学からも教員としての依頼があり、月に数回、東京と京都の大学へ講義に行かれるようになりました。満喜子先生も幼稚園と学校を自力で開かれ、疎開先にあふれていた子供たちの世話をされました。幼稚園の方は人手が足りないかと思われましたが、十代の子たちが手伝ってくれて、何とかやっていけるようになったそうです。軽井沢の学校は、はじめは二十四人ほどの人数で始めましたが、すぐに百人を超える子供が通うようになりました。

満喜子 メレルの日記『失敗者の自叙伝』を彼のスーツのポケットから見つけた私は、そのなかで彼がああ、結婚した最初の年について書かれたことを読みました。「私がフランスやイギリス、アメリカにいるあいだ、満喜子はどんなに寂しかったらうか。」紙を大切に作る彼らしく、手紙やメモなどの裏側に書き、それらは挟まれていました。「生まれながら育ちの良い彼女が、小作農の地域に身を置き、あらゆる不慣れな状況に順応しなければならなかった。私は自分の計画のためにお金を工面する代わりに、彼女のそばにいたべきだった。私はどうすれば彼女に償うことができるのだろうか。うっかりと愚かにも、私は結婚してまもないころ、彼女をおざなりにしていた。どうすればその年月を取り戻せるだろうか。私の愛しい人。」メレルが私を

一人にしたことをこんなに苦しんでいたなんて、考えもしませんでした。私  
はたしかに一人で過ごしていましたが、子供の世話をしたり、他人の問題に  
耳を傾けたりして充実していました。あなた、あなたは私を置き去りにした  
わけじゃなかったのよ。

雨が降り始める。

たま 降ってきましたね。

満喜子 冬から春になる時期に降る雨。芽吹きの雨。雨そのものは暗くて冷た  
いけれど、この雨がないと強く育たない。

たま 先生は前に、神様は強く大きく育つためには雨も必要やということを  
知っておられる、っておっしゃいましたね。

満喜子 ええ。

たま この戦争も雨ですか。

満喜子 えっ。

たま この戦争も日本が強く大きく育つために必要な雨なんですか。

満喜子 違います。

たま 先生、なぜ神様は戦争をお許しになられたのでしょうか。

満喜子 神様は人々に自由な意思をお与えになられたのです。戦争をするのは  
人間です。神様ではないのです。私たちは真剣に、平和とお互いを助け合う  
気持ちを持って、努力しなければなりません。

雨は降り続いた。

たま 終戦に向かっていくつかの出来事が迅速に動きました。史上初の原子爆弾が広島をほとんど壊滅させ、三日後に長崎がこの恐ろしい兵器でほぼ破壊されました。その後日本は裕仁天皇の決断で降伏を決定し、八月十五日、太平洋戦争の終結が公式に発表されました。

満喜子 メレルは祈る以上のことを行いました。二度首相をつとめ、このときは天皇の重要な相談役であった近衛文麿公爵に切迫して訴える手紙を書いたのです。日本人は幾世代にもわたって指図を受けてきました。引き裂かれ、恐れ、敗北した今の日本人には、ひとつにたるためにしがみつく誰かが必要です。天皇陛下がご自身を神として考えておられないことを認められるなら、アメリカと日本に相互に有利になることでしよう、と。メレルは食べ物不足、病気、そして戦争で受けた精神的苦痛のせいでもやつれ、弱っていました。それでも自分が愛する二つの国のために身体に鉄を流し込むような覚悟で東京へ出発しました。私は反対しました。「あなたは行くのに十分よくなっています。激しく動くことと死んでしまいます。」それでもメレルは答えました。「このことは命をかける価値があります。」メレルは帝国ホテルで天皇の詔書（しょうしょ）を書きあげ、西洋と東洋のあいだのデリケートな関係を取り持つ重要な仕事を成し遂げました。未来に向けて、すべての日本人が自信をとりもどすための行いでした。

たま 軽井沢から近江八幡に戻った満喜子先生がチフスに倒れたのはその数か月後のことでした。薬を手に入れることは困難で、熱と衰弱で昏睡状態にあった先生は重篤におちいりました。満喜子先生は栄養不足であまりにも衰えていました。一度心臓が止まってしまいましたが、奇跡的に動きはじめま

した。このことは近江八幡の人々に伝わりました。

たま 先生。

満喜子 たまさん。

たま 見てください、これ、卵です。先生に食べてくださいって、近所の方が持ってこられました。

満喜子 こんな貴重なものを

たま こっちも、

満喜子 これは、

たま ハチミツにクリームを混ぜた特性の治療薬です。むかし先生にお世話になったっていう人が持って来られました。こっちのお米と魚は、近江兄弟社の社員さん達からです。

満喜子 みんなお腹がすいているでしょうに。

たま みんな先生によくなっていたただきたいと思ってるんですよ。

満喜子 私は、敬遠されていたわけではなかったのね。

たま ええ。みんな満喜子先生のことを気にかけていたんです。

満喜子 感謝します。

たま 先生はまもなく回復し、以前のようにお元気になりました。軍に取り上げられていた幼稚園や病院は戻ってきましたが、元のように戻すためには、また苦労の連続でした。それでも戦争よりはましだと、私たちは辛抱して掃除をして、壊されたものを修理しました。私は思いました。雨の日もあれば晴れの日もある。そうしてその中を私たちは生きていくんだと。満喜子先生がすっかり回復されたあと、私たちは穏やかな晴れた日に琵琶湖のほと

りへ行きました。

満喜子 私はね、はじめここがあまり好きではなかったのですよ。

たま 近江八幡がですか。

満喜子 結婚する前に一度来たことがあったんです。けれど何だか好きにはなれなかった。

たま 今もですか。

満喜子 いいえ。アメリカに留学していた時にね、父が危篤だと知らされて日本に戻って来たことがありました。私はその時、帰りたくなかったんです。

しかし、あなたの父親は一人しかいないと私の先生に諭されて私は日本に戻ることにしました。横浜港に入る前に船の上から富士山が見えました。勇壮で美しい景色でした。日本に居場所を見出せなくてアメリカに行ったのに、私はその時はじめて自分が日本という国を、自分の故郷を愛しているんだということに気づかされました。不思議なものです。戦争が終わって軽井沢から戻ってきた時も、近江の山が、琵琶湖から見る丘陵が、日本らしい美しい景色で私はこの地を愛していたんだと思いました。

たま 晴れてよかったですね。

満喜子 ええ。

たま 先生、私ね、好きな言葉があるんです。「湖畔の声」。

満喜子 湖畔の声、というと近江兄弟社の。

たま はい。むかし考えたことがあります。この景色はきっと何百年も前からここにあって、これから何百年もここにあるのに、ほんの何十年しかいられない私ってなんやろうって。何のためにここにいて、去っていかなあかんなんやろう、って。ずっと長いあいだ解けない疑問でした。でも「湖畔の声」

ってという言葉聞いてはっとしたんです。ああ、私らは声なんかも知れへんな、って。

満喜子 声。

たま 発せられた端から消えていく。意味があったりなかったりする。けれど、確かにそこにあって、後にはなにも残らない。でもそうやって声は聞こえ続けていく。そういうもんかもしれへんなあって。

満喜子 聞かせて頂戴。

たま 我は声である。湖畔に叫ぶ声である。

二千年の昔、イエスが風光明媚のガラリヤ湖辺に立ち、偉大莊嚴なる御声を天下にあげ給いしを、我はわが琵琶湖のほとりに立ちて

反響せんとする声である。

満喜子 我はわが同胞の不安なる生涯に大いなる福音を宣伝しようとする者であって、愛国の熱情にかられ、愛神愛人の旗幟を立て、世のすべての暗黒と戦おうとするものである。

二人 神の声を聞いた諸君よ、来りて我を声援せよ。

勇ましく雄々しく、莊嚴なる使命を伝えることを祈りつつ、  
第一声かくのごときを出し、発刊の辞とする。

あたたかい風が吹いた。

終幕